

**「スプレキュア、健康薬、気功と長い回り道をして、広尾で子宮内膜症を克服しました」**

岡田清子（36歳）

**スプレキュアを半年使う**

生理痛が気になるようになったのは、25歳の頃からです。お腹の痛みだけでなく、出血も多くなって、生理日が近くなると憂鬱な気分になりました。だんだん痛みが強くなるので、婦人科で診てもらったところ、「子宮内膜症」と言われましたが、それでも、それから3～4年は仕事を1日休む程度で凌いでいました。いよいよひどくなったのは30歳を迎える頃です。ちょうど結婚が決まったこともあって、婦人科でもう一度きちんと診てもらったほうがよいと思い、父が親戚のつてを通して探してくれた病院に行きました。女医さんがやっている個人病院でした。その医師の診断も子宮内膜症とのことでしたが、治療はせずに、「大きな病院で診てもらってください」と慶応病院を紹介されました。

紹介状を持って訪ねた慶応病院の先生は子宮内膜症の権威ということでしたが、この先生に診ていただいたのは初診のときだけで、実際の治療に当たっていたのは別の若い先生でした。

慶応病院での治療はスプレキュアでした。1日に3回、シュッシュッと点鼻するホルモン剤で、半年間使いました。たしかにスプレキュアを使っている間は生理が止まっていますから、あんなに痛かった生理痛とも無縁の生活です。人間ってとりあえず苦痛から解放されると、もう治ったつもりになってしまうもので、「スプレキュアって効くんだなあ」と思っていました。

ただ、気になっていたことがないわけではありません。同じ頃に歯医者に通い始めたのですが、初診の際に「今、婦人科のほうでスプレキュアを使っています」と告げたところ、歯科医は「え?!」という表情をして「あれは肝臓を痛める...」と言いました。慶応病院で処方してくれている薬に間違いがあるはずない、と頭の中で歯科医の言葉を打ち消してみたものの、ずっと心に引っかかっていたことも事実です。

**のぼせ・体重増加・全身倦怠**

半年たってスプレキュアの使用を止めた後、思いがけないことが2つありました。ひとつは体重が5キロ増えてしまったこと、もうひとつは止めて2カ月後に始まった生理が前よりもっと辛かったことです。「治ったみたい」と感じていたのは思い違いもいいたところで、お腹はものすごく痛いし、出血量は多いし、塊になった血液も増えたように思いました。

「これはおかしい」と、すぐまた慶応病院に行きました。スプレキュアを止めて間がないということで、今度はスプレキュアより弱いホルモン剤（錠剤）をくれました。ところが、これを飲み始めたら、今度は絶えず「のぼせ」のような不快感があって、体調が思わしくありません。「のぼせ」はスプレキュアを使っていた時にもありましたが、今度は全身が気だるく、看護婦をしている友人に「顔色が悪いよ。自律神経失調症じゃないの」と言われたのもこの頃です。「薬が合わないのかもしれない」と、また慶応病院に行きました。すると、診察室に入っていった私の顔をみるやいなや、若い医者は「今、服用している薬はすぐに止めてください」と言いました。きっと医者目の私に顔つきは尋常ではないと映ったのだと思います。

「病気を治すために病院に来ているのに、どうしてこういうことになるの?」と、納得できない思いでいっぱいになりました。医師の説明も私の疑問を解消するにはほど遠いもので、「もうこんな治療を受けるのはよそう」と意を決して診察室を出ました。

**「死にたい」と思ったことも**

そういう状況のなかで結婚式を済ませ、主人の両親と同居の新婚生活が始まりました。楽しいはずの新婚の半年は、今思い返しても、辛く苦しいものでした。ホルモン剤の服用でホルモンのバランスが崩れたまま、体調はなかなか回復しません。生理時の痛さはますます強く、何をすることもできないほどなのに、義父母の手前、寝込むこともできない。嫁の私が子宮内膜症だと知ったら、義父母から何と言われるか...、そのことにもおびえていました。

慣れない嫁ぎ先での生活、最悪の体調、生理の辛さ、それらが精神状態をますます悪くして、「死にたい。死ねたら、どんなにラクだろう」と思ったことも1度や2度ではありません。マンションの6階から下を見おろして「ここから飛び降りれば、何もかも終わる」と思ったものです。

結婚して半年目で主人の転勤が決まって、義父母と別居することになったのが転機になりました。もし、あの追い込まれた精神状態のまま義父母との同居が続いていたら、本当に死を選んでいたかもしれません。

慶応病院でのホルモン治療に絶望していた私は、別居を機に、友人に勧められて食事療法と健康薬を飲むこと、気功の先生にかかることの3つを始めました。もう病院なんかに行くものか、という気持ちがあったからで、慶応病院に行くのを止めてから3年あまりは全く病院から離れたところで自分なりに治療を続けていました。

健康薬というのは、ビタミンA、ビタミンB群、ビタミンC、ビタミンE、カルシウム、ミネラルなど人間が必要とする栄養素を混じりけのないかたちで錠剤にしたもので、1カ月で相当量飲みました。値段のほうもバカにならず、半年で約100万円。実家の父からの援助がなければ、とても続かない治療で、その割には効果がないように感じられて、これは半年でやめました。

食事療法も健康薬も対症療法というよりは病気になりにくい体質に変えるというもので、すでに進行している内膜症の症状の緩和という点では目に見える効果は得られませんでした。気功の先生には2年半通いました。「子宮は大きくなっているが、気功で治せます」という先生の言葉に藁をも掴む思いで通い始め、週に2、3度のペースで気功をしてもらいました。1回の料金が1000円と安かったことや先生が女性で親しみやすかったことも、頻繁に通った理由です。先生がお腹に手をかざして、子宮に「気」を入れて、血液の流れをよくするという治療ですが、たしかにその直後はラクになるのです。

## 箸も持てない痛さ

でも、気功の先生のもとに通っている間も、生理は重くなる一方です。生理の間、3日3晩眠れず、3日で体重が3キロ減ったこともあります。食事の支度はおろか箸を持つこともできず、ただ身体を横たえて痛さに耐えていました。トイレに這うようにして行き、便座に腰をおろすのもやっとの思いでした。出血はますますひどく、1回の生理で塊になった血がどんぶりに1杯ほども出ました。主人には「生理中は家のことが何もできなくてゴメンね」と言って、ただ痛さに耐えていました。気功の先生に「痛み止めを使ってはいけない」と言われていたからです。そんな私を見て、主人は病院に行けば最終的には子宮全摘になることも承知で「早く病院に行け」と言いました。こんな症状が続くのであれば、子宮全摘も仕方ないと思ったようです。

気功を始めて1年たち、2年たってもいっこうに症状は軽くなりません。先生も「変ねえ。子宮は小さくなっているのだけれど」と言い出す始末です。この頃になって、私自身も「気功では治らない」と確信するようになり、もう1度真剣に医者を探さなければ、と思い始めました。

テレビで見た、全摘をせずに子宮筋腫や子宮内膜症を治すという女医のクリニックにも行きました。ところが、一通りの診察の後でその先生が言った言葉は「スプレキュアをやってみましょう」。反射的に、冗談じゃない！と思いました。同じ女性でありながら患者にスプレキュアを勧めるその医師に怒りさえこみ上げてきました。

## こういう先生がいるんじゃない！

本屋や図書館にも足を運んで、手がかりになるような本を探しました。そして、図書館で出会ったのが斎藤先生の『子宮をのこしたい10人の選択』です。すぐに借りて家に持って帰り、毎日毎日、何回も何回も読み返しました。私と同じように内膜症で苦しんでいた患者さんが、健康を取り戻し、子宮も温存している。その驚きは「こういう先生がちゃんといるんじゃない！」という喜びに変わりました。もう迷いはありませんでした。

手術を受けたのは95年10月9日の月曜日です。貧血がひどかったために、全身麻酔で輸血を受けながらの手術でしたが、麻酔が醒めた後の傷口の痛さは「えっ?!こんなもの?」と思うほどで、生理中の痛さのほうがずっとずっと辛いと思いました。

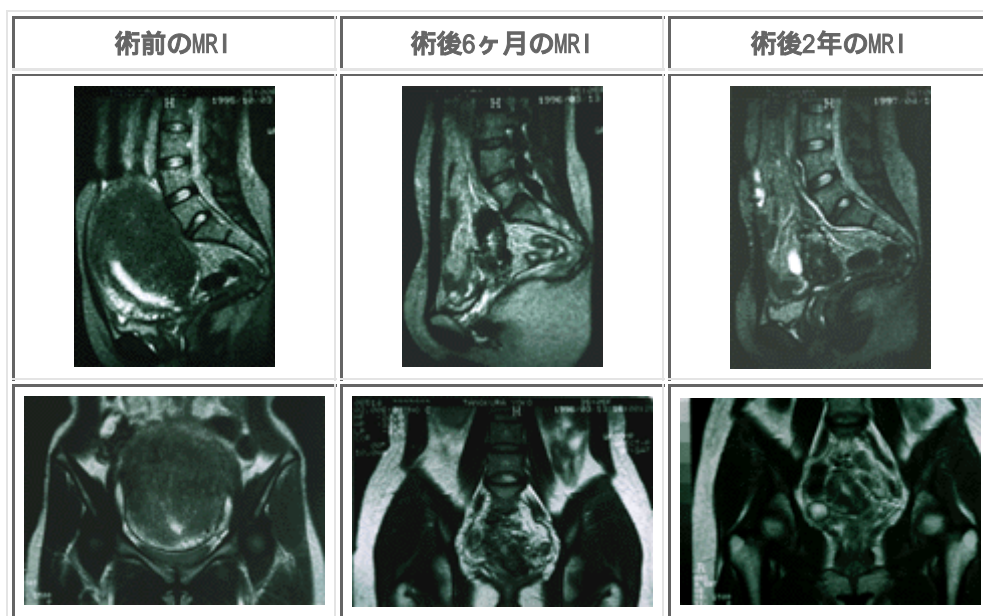
斎藤先生に出会うまで、長い回り道をしました。ホルモン治療、健康薬、気功とずいぶんお金も使いました。でも、それらは私自身が納得できる先生に出会うために必要なプロセスであったと思います。

現在、子宮内膜症の治療はホルモン剤によるものが中心で、手術による根治治療は不可能とされていると聞きます。でも、私は斎藤先生の手術によって、子宮内膜症を克服し、子宮も残していただきました。以下の写真は、私の術前、術後のMRIです。これを見ていただければ、手術によって、子宮が正常に戻っていることがわかってもらえると思います。

### 主な血液検査のデータ

診断：子宮腺筋症

	術前	術後
CA-125	220	37.9
RBC	368	470
Ht	31.3	40.6
Hb	7.8	13.3



## 「子宮筋腫と腺筋症の合併症。子供も2人いる。でも、どうしても子宮を残したかった」

大住恵子（45歳）

### 怖くなるほどの出血

8月18日に<術を受けたばかりです。私は子宮筋腫と腺筋症の合併症でした。手術で筋腫291グラムと内膜ポリープ、それと腺筋症部分を摘出し、術後の経過は順調です。予定通り、23日の土曜日には退院して、今は家でのんびり体力の回復に努めています。

生理がひどくなったのは、40代に入ってからです。腺筋症の患者さんの多くは生理時の痛みを訴えられるようですが、私の場合は痛みはあまりなく、とにかく出血量の多さが問題でした。あの多さは月経血の範ちゅうをはるかに超えていたと思います。いったいどこからこんなに出血するのか怖いくらいでした。分厚いナイト用のナプキンを使っていても、30分もすると心配になってきます。それでトイレに行ってナプキンを取り替えると、ずっしりと重いナプキンから経血が滴り落ちそうなのです。

身体を動かすと、それに合わせるかのようにドーンと出血するので、生理中はとにかく安静にしていました。主人はパイロットという職業柄、搭乗機の都合で日中家にいることがあるのですが、その主人の目にも私の生理が尋常ではないと映っていたようです。

### どうしても全摘はしたくない

たぶん子宮筋腫だろうと思っていました。すでに40歳を過ぎ子供も2人いましたから、病院に行けば全摘を勧められるだろうという予測もありました。私は21歳で結婚しましたから、22歳で長男を、25歳で次男を出産しています。長男は社会人、次男は大学生になりました。

40代半ばになれば更年期世代。子宮を失うことへの抵抗がそれほどないのか、私のまわりで子宮筋腫の手術を受けた人は全員が全摘手術でした。子宮筋腫の手術イコール全摘手術、という認識が当事者である女性たちにしっかりインプットされているのです。

でも、私は子宮を取られなくなかった。全摘手術を受けた何人もの人に、「全摘してどうだった？」と聞いてみましたが、返ってくるのは「かえってさっぱりするわよ」とか「これから子供を産むわけでもなし、取ってしまっても別に何も変わらないわよ」という言葉ばかりです。

でも、本当にそうなのかなあ、という気持ちが絶えずありました。たしかに全摘すれば症状は解消されるだろう。でも、肉体的、精神的に何もダメージを受けないのだろうか。私はやっぱり取られたくない、ホルモンを分泌する女性にしかない臓器を取ってしまってもいいわけがない、と頑なに思っていました。

そんな時にやはり全摘した友人から聞いた言葉は忘れられません。「全摘してから、夫婦生活ができなくなった」と言うのです。ちっともそんな気になれなくなったというのが理由のようでした。全摘して何も変わらないわけではないと思っていた私は、この友人の率直な告白に感謝しました。

### ホルモン療法で元気がなくなっていく

子宮を取らずに病気を治してくれる医者を探して、都内で個人病院を開いているS先生のもとに1年半通いました。この先生は切らずに子宮筋腫を治すということで定評のある先生でした。

切らずに治す治療はスプレキュアによるホルモン療法でした。半年間スプレキュアを使い、次の半年は使用を休み、その次の半年はまたスプレキュアを使うという治療を1年半受けてきて、ホルモン療法に疑問を感じ始めていました。半年間スプレキュアを使った後は、たしかに筋腫の大きさは3分の2ぐらいになるのですが、使用を止めて半年目にはまた元に戻ってしまうのです。経血の多さも少しも改善されません。

ホルモン療法の副作用も強く出ました。肌がカサカサとしてきて艶がなくなり、自分の身体の中でスプレキユアを受け入れて葛藤しているのがわかるのです。元気がなくなって、いつもはおしゃべりな私が誰とも話しくなくなってしまう。鬱の状態になっているのが自分でもわかり、「ああ、いつもの自分でなくなってしまう」と思うと、とても怖かったです。

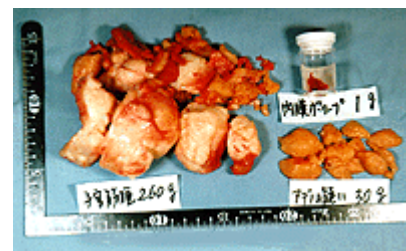
1年半たっても改善が見られない私に、なおもS先生はスプレキユアを使おうとしましたが、もうこれ以上スプレキユアは使いたくないと話して、ピルを使うことになりました。「閉経を迎えれば筋腫も小さくなるから、なんとかホルモン療法で閉経まで持ちこたえましょう」というのがS先生の方針でしたが、閉経を迎えるまでには少なくともまだ7、8年はある。それまで、とてもこのホルモン療法を続けることはできない、と思う一方で、かといって切らずに治す治療法は知らない。どうしたらいいだろう...、思案に暮れていました。

#### 40代後半の楽しい生活のために

広尾のことを知ったのはひょんなことからです。会員制のスポーツクラブに通っていたある日のこと、エアロビクスのレッスンを見ていた私に、「今日はやらないの？」の話しかけてくれた年輩の婦人がいて、私が「子宮筋腫があるから激しい運動は控えているの」と答えると、「子宮、取りたくないでしょ」と言うのです。「ええ」と答えると、「それなら、いい病院があるわよ」と教えてくれたのが広尾だったのです。なんでもその方のお嬢さんが広尾で子宮保存手術を受けて、その後妊娠されたというのです。

この出会いに私は感謝しています。すぐに電話番号案内で広尾を調べて、電話をしました。S先生のところでピルを使い始めて2カ月たった頃でした。

斎藤先生に診ていただいたら「大丈夫。子宮は残せます」とのこと。主人にはよく考えて手術するかどうか決めるようにと言われて来たのですが、斎藤先生の説明を聞いたその場で手術を受けることを即決しました。



この決断は間違っていなかったと確信しています。子宮を取られることにずっとこだわってきて良かったと思いました。女性の40代後半は、子育てからも手が離れ、自分自身のことや主人との二人の生活に時間が使える良い時代です。その貴重な時代を、スプレキユアの副作用に苦しみながら過ごすのはとても残念だし、ましてや子宮全摘の後遺症とともに過ごすのはもったいないことです。

健康を取り戻して、主人と食事に出かけたり旅行したりという、これまで「お預け」だった生活ができるのがとても嬉しい。「手術にかかるお金のことは心配しなくてもいい」と、広尾で手術することに賛成してくれた主人に感謝しています。

「残したかった子宮を残してもらって、来年はニュージーランドに夫婦で留学します」

田代公子（38歳）

### 吐き気も痛みも回復へのプロセス

9月1日に手術をしました。腺筋症の病変部を摘出していただいて、経過は順調です。4日の木曜日にはお腹から出ていた管（腹腔内の血液や滲出液を体外に排出するための管）を抜いて、術後初めてシャワーを使用しました。手術する前は、本当に4日目にシャワーができるようになるのかなあ、と思ったりもしたのですが、シナリオ通りというか、シャワーしても十分に大丈夫なほど回復しているのです。

手術した夜は、痛みより吐き気のほうが強くて、一晩、吐き気をこらえるのに必死でした。手術のあと翌朝までは「身体を動かさずに、頭もまっすぐ上を向いた状態で寝てください」と看護婦さんに言われるのですが、上を向いているとますます気持ち悪くなるので、えーい、横を向いてしまえ、と頭を動かして吐き気を紛らわせた。手術した当夜にあまり頭を動かすと、腰椎麻酔の影響で4～5日後に頭痛をもよおすことがあるのだそうです。大丈夫かな、と少し心配しましたが、幸い何事もなくてホッとしています。

吐き気が少しおさまると、今度は痛みを強く感じるようになりましたが、この頃には「もう胃腸が動き出しているので、今は痛み止めをする段階ではないです。もう少しの辛抱。がんばって！」と看護婦さんに言われて、眠れぬまま朝を迎えました。

手術当夜の辛さは人それぞれなのでしょうが、「今は苦しいけれど、これを乗り越えたら楽しくなる」と思い、吐き気も痛みさえも一段階ずつ楽しさに向かっていくプロセスなのだと思うようにしました。

### 子宮全摘か、スプレキユアか

残したいものを残してもらったのだから、これくらい我慢しなくちゃ。入院中、痛い思いをするたびにそう自分に言い聞かせました。それほど子宮を失いたくなかったのです。

私は4年前に一度、子宮筋腫の核出手術を住まいのある大阪で受けています。33歳で結婚して、その翌年に手術。妊娠を望んでいましたから、子宮を残してもらうことを約束しての手術でしたが、筋腫核は全部取りきったというお話でした。

でも、その後も妊娠する気配はなく、1年経ち、2年経つうちに、生理時の出血がだんだん多くなってきました。生理が始まって2日目、3日目あたりは特にひどくて、その翌日は貧血でとても起きていられる状態ではなく、白い顔をして寝てばかりいました。生理期間もだんだん長くなって、10日間も出血が続きました。

核出手術をした病院で定期的ながん検診を受けていましたので、そのつど術後の経過を見てもらっていましたが、8月の検診で思いがけない宣告を受けました。「出血がひどいのは、おそらく子宮筋腫が再発したからでしょう。もう核出手術はできないから、子宮全摘手術をするか、スプレキユアをするか、9月までに決めてきてください。ただし、スプレキユアは副作用があって、仕事など日常生活に多少影響が出るかもしれません」と言うのです。

全摘」という宣告は唐突でした。しかも、もう一方の選択肢であるスプレキユアは副作用が強いという。どうしよう、全摘もスプレキユアも、そのどちらもイヤだ...、頭が真っ白になって、涙があふれました。

## 夫と上京、手術を即決

私は大阪でコンピュータ学校の講師をしています。中高年や主婦の人たちにワープロ機能の文字入力や文書作成などの基礎を教えるかたわら、時々通訳の仕事もやっています。

全摘かスプレキアかの選択を迫られて、涙ながらにパソコンに向かいました。インターネット上に何か子宮筋腫に関する情報がないだろうかと思ったからです。

ありました！広尾です。「子宮」でアクセスすると、たしかに婦人科のクリニックはいくつも名前が出ていますが、医療内容の紹介も含めて、これほど充実したホームページをもっているところは他にはありませんでした。

ホームページに載っていた斎藤先生の本『子宮をのこしたい 10人の選択』を読みたいと思い、本屋で探しましたがどこにもありません。それなら、直接、先生に会って診ていただこう、と電話で予約をとりました。夫と二人で初めて広尾を訪れたのは8月19日の火曜日のことです。

先生の診断はおそらく腺筋症だろうとのこと。たまたま一人空きのあった9月1日の手術日に手術してもらうことを、その場で決めました。夫も先生の説明を聞いて納得し、すぐに同意してくれました。大阪に帰って親や友人に相談すると、いろいろな外野の意見に惑わされて決心が鈍ると思ったことも、即決した理由です。

## MRIとCTを持って、再び上京



初診から手術までは2週間もありません。手術前にもう一度大阪から検査のために上京するのは大変なので、大阪でMRIやCTを撮ってはどうだろうか、という斎藤先生の提案で、大阪でお世話になっていた総合病院の内科の先生に頼み込んでMRIとCTを撮りました。その先生は、私の生理が重いことを知って「一度きちんと検査したほうがいい」と言っていたのです。

その言葉を盾に、「先生は検査をなさいとおっしゃいましたよね。だから、お願いします」とかなり強引に頼みました。幸いだったのは、その総合病院には婦人科がなかったことで、もし婦人科があれば当然そちらに回され

ていたと思います。

MRIとCTを持って、母と再び上京。手術は、前に受けた核出手術の際にできた癒着を剥すのに時間がかかったようで、3時間近くかかりました。手術の途中で、よかったですら手術室へどうぞ、と母が呼ばれたそうですが、母はコワくて、とても見に来れなかったそうです。

手術中に指先が冷たくなったので、看護婦さんの手を求めて宙に指先を泳がすと、看護婦さんがしっかり手を握って下さいました。その手の温かかったこと。無理を言って、ずっと握っててもらいました。この温かさに通じる親身なケアは、入院中変わることがありませんでした。

## 健康を取り戻して、夢の実現へ

9月6日の土曜日に予定通り退院しました。夫が金曜日に迎えかたがた見舞いに来てくれた時には、もう普通に歩き、シャワーも使っていましたので、その回復ぶりにびっくりしていました。前回、大阪で核出手術を受けた時とは回復のスピードが全然違う、と夫も思ったそうです。写真はその時に広尾のリビングで写したものです。私たちには夢があるのです。来年、二人でニュージーランドに留学します。私は現地語のマオリ語を勉強し、英語教師である夫は将来の移住に備えて、現地のことをいろいろリサーチする予定です。



その夢の実現に向けて、ニュージーランドに出発する前に3カ月間アメリカのシアトルで語学研修する計画ですが、それに先駆けて、11月に夫と一緒にシアトルに学校の下見に行ってきます。シアトルにはかつて私が通訳したことのある友人たちがいて、私の入院中にはインターネットで激励のメールを送ってくれました。今回、夫

が広尾に来る時に、それをプリントアウトして持って来てくれて、とても嬉しかった。シアトルで彼らに会って、元気になった姿を見てもらうのを楽しみにしているところです。

こんなに前向きになれるのも、広尾で残したかった子宮を残して、健康を取り戻したからなのです。斎藤先生に感謝しています。

ひとつだけ気がかりと言えば、9月までに全摘かスプレキユアか決めてくるように、と言われていたこちらの先生にどう報告しようかな、ということ。もちろん、広尾を退院する時にいただいたファイルを持って、子宮保存手術を受けて来たことを包み隠さず話してくるつもりですが、こちらの先生がどのような反応を示されるか興味があります。同じ婦人科のドクターとして、ぜひこういう手術があることを認めて、どうしても子宮を残したい患者の声に応えてくれるようになってほしいと思っています。これは私ばかりでなく、広尾で手術を受けて子宮が救われた女性みんなが感じていることだと思います。



「体の置き場がないくらいに苦しかった3320グラムの筋腫をとっていただいて、2年が経ちました」...レポート・その1

楠本浩子（37歳）

## 教科書通りの子宮に戻った！

95年10月2日の手術日からちょうど2年が経ちました。2年ぶりに術後のMRIを撮るために、岡山から横浜にやってきました。JR鶴見駅に降り立ち、そこから手術前日に「これで元気になれるんだ」という最後の期待を胸に歩いた同じ道を、今もう1度、広尾に向かって歩いているのだと思うと感慨深いものがありました。

鶴見川にかかる橋を渡るとすぐに広尾が目の前に見えてきました。もう懐かしさと嬉しさと胸がいっぱいになりました。広尾では斎藤先生と看護婦さんたちが優しく迎えてくださり、本当のわが家に帰ったようなアットホームな雰囲気はあの頃のままでした。

今回撮った術後のMRIの画像には、見事に完璧で健康な子宮の姿が映し出されていました。先生が「ほら、見てごらん。教科書に載っている子宮と同じ正常な子宮に戻っているよ」と、とても嬉しそうにMRIを見せてくださいました。術前のMRIの画像と見比べながら、先生はまた「これが元通りになるんだよ」と、何度もかみしめるようにつぶやかれ、しばらくの間、先生と二人で喜び合いました。3320グラムもの筋腫で占められ、原型すら想像もできない状態だった子宮でも、こんなにも小さくきれいな形にちゃんと戻ることにも驚きました。あの胸の方までぎっしり詰まっていた筋腫を抱えて生きていくことにも疲れ果てていた手術前の苦しさを思い返すと、夢のようで、ここまで元の体に戻してくださった斎藤先生への感謝の気持ちは言葉では言い尽くせないほどです。

斎藤先生との出会いなしには、現在の私は存在しません。ここに、私が初めて先生に宛てて書いた手紙がありません。先生がとっておいてくださったものを、今回、再び目にするようになりました。これを読むと、あの頃の自分が鮮明によみがえってきます。その一部を紹介します。

## 手紙・その1

--3年前(1992年8月)より周期的に(必ず毎月)おなか妊娠したように張るようになり、(今はずっと妊娠6~7カ月状態で、生理後7~10日ぐらいで最高にパンパンの7~8カ月状態にふくれてしまいます)体の置き場がないくらい重苦しくてたまりません。生理が重いとか、不正出血とか、そういうことはなく、反対に生理が待ち遠しいくらいで、生理中とその後しばらくは、重苦しい日々の中でも比較的快調なのです。

これまで、こうしてずっと自分の体をだまし続けて、はた目には健康体を装って、今までなんとか生きてきました。よくもこんな体で普通の生活をして(演じて)いるなあと、自分でも感心するほど...。でも、健康体のふりをするのももう疲れました。さすがの私ももう限界かな...、ギブアップ寸前といった感じです。(今の私の状態は特定の知人、友人ぐらいしか知りません。両親にも言っていない。偽り続けている...、さぞかし驚くと思う)

本の中の患者さんのMRIの写真を見るたびに、「私の場合、いったいどうなっているのだろう...」と思えます。自覚症状にしても、おなかの中が胸の方まで筋腫でぎっしり詰まっている感じですから。--

## 手紙・その2

先生との出会いは、婦人画報社の『子宮をのこしたい 10人の選択』でした。大きなおなかを抱えて生きることに疲れ果てていた95年の4月、たまたま手にとったタウン情報誌に、「子宮を救われた女性10人の衝撃と感動のドキュメント！ 100名様にプレゼント」という囲み記事を見つけたのです。

それまで、新聞や雑誌に「子宮」という文字を見つけると、どんな小さな記事でも見逃さず目を通してきた私にとって、これほどの福音はありませんでした。すぐにプレゼントに応募し、届いた本をむさぼるように何度も読み返しました。

先生に初めてお手紙を書いたのは、その直後です。手紙をもう少し続けます。

--先生の『子宮をのこしたい 10人の選択』を読ませていただきました。私も子宮筋腫らしく、現在、おなか妊娠7~8カ月状態（妊娠したことないので、わかりませんが）になっております。今年1月に友人にひっぱられ、生まれて初めて産婦人科の診察を受けました。超音波をあてて画像を映すだけの検査でしたが、その結果はお医者さんが「...これは!!」と絶句するほどかなり大きな筋腫のようで、すぐに大きい病院を紹介すると言われたのですが、そうすると、あとはとられてしまうだけと感じたので、それからはこの病院にも行っていません。

でも、今までぜったい手術はイヤだと思っておりましたが、先生のこの本を読んだからは、もう先生しかいない!!、ぜひぜひ、1日も早く先生に手術していただきたい!!、と強く思うようになりました。早く楽になりたい。普通の体になりたいのです。--

## 死ねたらどんなにいいだろう...

振り返ってみると、入浴中、なんとなくおなかをさわってみた時に、梅干し大くらいの塊があるのに気づいたのが31歳の頃でした。さわるとグリッグリッと動く感じで、「あれ？脂肪の塊かな」と思っていたのですが、次第に卵大に、そして33歳を過ぎる頃からはそれがどんどん大きくなっていくのが自覚できました。

どうやら子宮筋腫らしいと感じてからは、漢方薬やら民間療法やらあらゆることを試してみました。健康雑誌に黒酢が子宮筋腫に効くと書いてあれば黒酢を飲み、アロエが効くとあればアロエジュースを。摺りこぎでゴシゴシこすれば小さくなると聞けば実行し、足のツボ療法が流行れば足をもみ...。そして、あのヒーリングパワーの高塚光さんにも2度ほど会って、ヒーリングしてもらったりもしました。

しかし、私のおなかのしこりは決して小さくはなりません。でも、病院に行けば、子宮ごと取られてしまうことは目に見えていたので、病院に行くわけにもいかない...。解決の糸口さえつかめず悩み続けていた私に、安眠の夜はありませんでした。なにしろ、おなか重苦しくて仰向けに寝ていられず、夜中に起きてはベッドの上に座ったまま眠るという状態でした。

そのうち、毎月、例のごとく生理と生理の間におなかふくれ出すと、足や局部までパンパンにむくんでしまうようになり、下半身に鉛でも入っているかのように重く、歩くのも苦痛なほどにまだまになっていきました。そのうえ、尿意はあるのに、トイレに座っても尿が出ない。筋腫が腎臓まで圧迫しはじめていました。

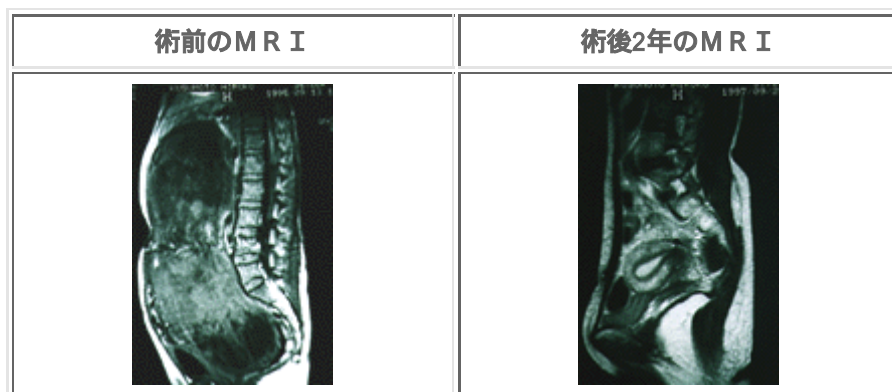
ついに限界が来たな、という感じでした。生理の前におなかふくれてくるのは、子宮を取り巻くたくさんの血管が怒張り血流がさかんになるからなのだと後で先生に聞きましたが、あの重苦しさは言葉にできません。

そうして、どんどん私のおなかは大きくなって、筋腫だらけになっていったのです。それにつれて、どんどん体が辛くなって、今日生きているだけで精一杯...、でも、明日もまた生きなきゃ...という毎日でした。

一人になると涙があふれてきて、このまま死ねたらどんなにいいだろう、この病気がガンのように放っておけば死ぬようなものであったらいいのに...と、このままでは”半死に状態”で一生を過ごさなければならぬ私にとって、この苦しさから逃れるには”死”しかないと思い詰めてもいました。

喫茶店の窓際に座ってぼんやり外を眺めている時でも、視線は道を行く女性のおなかに向いているのです。みんな普通のおなかをしていて、私のような人は誰もいない。どうして、私だけがこんなに苦しいのかと、見ず知らずの女性に対して、健康であることを羨むより憎しみや敵意さえ感じたことも事実です。

もしかして、これは悪い夢なのかもしれないと、夜中に目を覚ましおなかをさわってみても、現実は大きく硬くふくらんだおなかでしかありませんでした。



---

Copyright (C) 1997  
HIROO MEDICAL CLINIC

## 「検査から手術までのあれこれ、2年経った今でも鮮明に覚えています」...レポート・その2

楠本浩子（37歳）

### 手術を決心

一縷の望みを託して書いた手紙に先生はすぐお返事をくださいました。たくさんの資料も添えて…。そのお手紙には、「かなり大型の筋腫のようですが、まずは子宮を救えると思います。…貴女くらいの大きな子宮筋腫の患者さん数百例は救い続けています」とありました。その自信あるお言葉に、こんな大きな筋腫でも斎藤先生なら必ず助けてくださるんだと確信するとともに、斎藤先生に手術していただこうと、その時、心に決めていたのです。

95年の8月30日に初めて広尾メディカルクリニックへ電話をしました。先生のお手紙にも「MRI等の検査日を予約してから来られるとはかどります」とありましたので、「できるだけ早く検査をしていただきたいので…」と申し出たところ、「明日までに検査の日を決めておきます」とのことでした。翌朝、電話を入れると、検査は2週間後の9月13日に決まっていました。

### 苦しかったMRIの検査

検査当日、朝早く岡山から新幹線で新横浜へ。そして、JR鶴見駅から歩いて佐々木病院までなんとかたどり着きました。

午後1時半より検査となり、検査衣に着替え、生まれて初めてMRIとCTを体験することになりました。しかし、このMRI、通常ならストレッチャーに寝ているだけでいいのですが、私にとっては1時間近くも仰向けになってじっとしているということは、たまらなく苦痛でした。

CTはMRIより短時間でしたが、これもまた仰向け状態で機械が1～2センチくらいずつ移動しながら作動するため、じれったくて、まだかまだかという感じでした。

汗ぐっしょりになってMRIとCTを撮り終えた後、胸部レントゲン撮影、そして心電図もとり終え、長椅子で少し休んでいると、「楠本さん、すみませんが、もう1度、MRIを撮り直しますので…」との声。「えーっ！！もう1度！？ウソでしょー！！」、筋腫があまりにも大きかったので、撮りきれなかったらしいのです。

### まるで火葬場の炉の中のように

さらに1時間の苦痛が始まりました。再度、ストレッチャーに乗せられてMRIの中へ。検査の途中、もはや耐えきれず目の前にあったボタンらしきものを押してみました。すると、技師の方の声がして「あ、動かないでください」。しかし、私はマイクラしきものに向かって「気分が悪いんですけど…」と訴えてしまいました。技師の方は「あと10分ほどがんばってください。それで、おしまいですから」…。

そう言われてからの10分というのが異常に長く感じられて、「早く私をここから出してよー！！」とか「もういいから、このまま私を殺してー！！」などとずっと心の中で叫んでいました。MRIの作動中は、体に響くほどのかなり大きな音が聞こえ、それがなんだかモクギョの音にも似ていて、まさに火葬場の炉の中に入れられた気分でしたから。

MRIからやっと出られた時にはストレッチャーに汗の人型（ひとがた）ができていました。その後、血液検査と尿検査を終えて、これで全ての検査が終了。あとは広尾に電話を、と思っていると、事務長さんが心配して車で迎えに来てくださっていました。

## カルテに「巨大子宮筋腫」

佐々木病院から車で5分ほどの住宅密集地の中にぼつんと広尾メディカルクリニックはありました。中へ案内されてびっくり。およそ病院とは思えない、プチホテルかペンションのよう。ポカンと見とれていると、2階から白衣姿の斎藤先生が階段をスタスタと降りてこられました。

「初めまして」の挨拶もそこそこに、開放的な診察室に通されました。さっそくMRIのフィルムをご覧になるやいなや、先生は「すごいね」と一言。そして、カルテに「巨大子宮筋腫」と書かれているのを、私はポーッと見ていました。私も初めて実際に自分のおなかの中を見たわけですが、我ながら「本当にすごいな」と思いました。



おなかの中が筋腫でぎっしり詰まっていた、ほかに何も無い。胃や腸はいったいどこにあるのか見あたらない。それどころか、筋腫が背骨も巻き込んで、背中にまで達している…。

胃も腸も何もかも胸のあたりに押し上げられているらしく、先生は「よくこれで食べて排泄できていることだね。よほどあなたが鈍感なのか我慢強いのか」とおっしゃり、「でも、ちゃんとした子宮が残っているから、子宮は元通りになるよ。救えるよ」と言ってくださいました。



その言葉に「やった！！」と私は心の中でガッツポーズをとりました。この言葉が聞きたくて、私はここまでやって来たのです。もう安心です。

## 待ち遠しかった手術

「救えるよ」と言ってくださった先生の言葉は決して意外な言葉だとは思いませんでした。なぜなら、斎藤先生なら必ず助けてくださると信じていましたから。こうなれば、できる限り早く手術していただきたくて、手術は19日後の10月2日に決まりました。

帰りの新幹線の中でも、体はあちこち苦痛だらけでしたが、これも10月2日までの辛抱だと思うと、心の中はさわやかでした。

それからは1日1日と手術の日が近づいてくるのが嬉しくて、早くその日が来ないかな…と待ち遠しかった。なんでもできる健康な体になれるのですから。何年も得られなかったものがもうすぐ得られるという喜びでいっぱいでした。

手術前日、母と広尾の近くのホテルに1泊し、大きなおなかで過ごす最後の夜を迎えました。数日前から例のごとくパンパンにおなかふくれ上がる時期に入っていたので、ホテルでも夜中にベッドに起き上がって痛みを凌いでいました。

手術当日、9時に広尾に到着。2人目の手術ということで、その時間まで暢気なことに母と2人できれいな病室でポーズをとって写真を撮ったり、テレビを見たりとリラックスして過ごしました。

## 助手の先生が「臨月ですか？」

1人目の方の手術が無事終了し、いよいよ私の番となりました。ドラマのように身内の人に「がんばって！」なんて言われながらストレッチャーに乗せられて行くのかと思ったら、手術室まで自分で歩いて行って手術台に上がるので、なんだか拍子抜けという感じでした。

そして細い手術台の上で、腰椎麻酔をするためにエビのように丸くなるようにと言われました。「平均台の上のおなかの大きな裸の曲芸師」…そんな奇妙でアクロバチックな格好を想像すると、これから手術だというのに、なんだか笑ってしまいました。

アイマスクをされ、口には酸素吸入器がつけられました。「いよいよこれからなんだな」と少し緊張していると、助手の先生が「臨月ですか？」。おそらく、私のおなかを見て思わず口をついて出たのでしょう。すると、

斎藤先生が「いや、シキウキンシュ！！」と返されているのが聞こえ、「あー、言われると思った...」と思ったものです。

「よろしくお願ひしませう」とベッドの上から言うと、「大丈夫」というように看護婦さんが私の左手をトントンとたたいてくれましたが、その間にすでに私のおなかではカチャカチャと筋腫の取り出し作業が始まっていました。「えっ、こんなにもいきなり始まるものなの？」と戸惑ってしまいました。

### 遠のく意識の中で「先生、助けて！」

途中、スーッと意識が遠のいていく感覚が何度かありました。酸素吸入器を持つ看護婦さんの手が絶えず私を揺さぶり起こしていました。

血圧がどんどん下がっているらしい...。息苦しい...。輸血を始めると少し楽になって、手術中の音をまた聞き取る余裕も出てくる。先生が「カンシ」と言われると、体の中のものを引っ張ったり、取り出す感覚もわかりました。

でも、また、すぐにスーッと行ってしまいそうになるのです。周りでは、輸血用の血液が足りなくなって、緊急に取り寄せている様子で・・・遠のく意識の中で「先生、助けて！」と叫んでいました。

しかし、最後にすごい早さで縫合されているのは、なんとなくわかりました。そして、手術直後、先生が「楠本さん、お母さんが泣いて喜んでいるよ」と教えてくださいましたが、うなづくことしか私にはできませんでした。

**「止血のために東邦に転院、そして再手術。改めて、東邦の皆様、斎藤先生に感謝！！」...レポート・その3**

楠本浩子（37歳）

**手紙・その3**

手術は5時間くらいかかったと聞きました。摘出された筋腫は3320グラム。偶然にも、それは私が生まれた時の体重とほぼ同じ重さでした。

手術後、病室に移されて、夜明けに恐る恐るおなかに手をあてた時の感動は忘れられません。その時のことを、ずっと後になって先生に宛てた手紙にこんなふうには書いています。この手紙も先生がとっておいてくださったものです。



--今、私はおかげ様でとっても元気です！唯一、おなかのキズが、かつて私が病人だったことの証です。ほんの1年ちょっと前まで、大きなおなかをかかえて苦しんでいたのがウソのようです。あれは、ずっとずっと遠い昔のできごとだったようにも思います。とてもありがたいことです！

先生に手術していただいて、ほんとうによかったと思っています。手術直後、夜明けに目が覚めて、恐る恐るおなかを手でさわってみた時、"おなかぺしゃんこになっている！！"、あれは感動ものでした。（まさにあの時は、ししゃもの子をとったみたいに、肋骨から下がごっそりえぐられた感じでした！）こんなおなか、長いことさわったことがない。その時、やっと解放された！と実感しました。うれしかったです。私はもうそれで十分でした。あとはもうこわいものなど何もない。出血が止まらなくて、あのムダな肉塊を先生がとってくださった...、それだけで。

でも、東邦で子宮を全摘するかもしれないと説明された時、もう1度手術を受ける恐さなどはなく、ただ子宮をとられる！というショックで頭がいっぱいでした。「それじゃあ、今までの私の苦労はなんだったの！」といった感じで、"死んでもいいから、子宮は残してヨ"と心の中で叫んでいました。でも、頬をつねっても、ひっぱたいても夢なんかではなく、これが現実でした。だけど、先生にすがるをお願いした時、「大丈夫だよ」とおっしゃってくださった。その言葉に安心しました。"絶対、大丈夫だ"って。--

**止血のために再手術**

東邦で子宮を全摘するかもしれないと説明された時...、というのは、術後に出血が止まらず、手術の翌日の深夜に、先生の出身校である東邦大学医学部附属大森病院に転院し、そこで出血の原因を突き止めるための再手術をした時のことを指しています。筋腫がとても大きかったために手術中の出血が多く、輸血を行いながらの手術でしたが、その出血が術後1日経ってもなかなか治まらなかったのです。

かなりの貧血状態だったらしく、自分では意識をしっかり持っていたつもりでしたが、さすがに頭がボーッとして、考えがまとまらない状態でした。その日、東邦では大村先生のオペの手が空き次第、手術が行われることになりました。

私の周りで何もかもが流れるように事態は進んでいったのでした...

大病院の手術室は 通路の両脇にいくつも手術室が並んでいて、まるで人間再生工場のようにあちらこちらで手術が行われていました。今度は全身麻酔だったので、手術台に移され、酸素吸入されているうちに意識はなくなっていました。

東邦の手術室には斎藤先生も入ってくださり、終始「大丈夫だよ」と声をかけてくださいました。付き添ってきた母が「どうか子宮を残してやってください」と言うのにも「大丈夫です」と励ましてくださったそうです。一度閉じたおなかをもう一度開けての手術となりましたが、その結果、出血は腹膜にそった血管からのものであることがわかり、止血の処置後、子宮は残りました。先生への手紙には、その時のことを書いています。

## 手紙・その4

--東邦で手術を受けた時、あの変な体験（手術中、一瞬、自分で自分を見ていたような気がした…。手術台の上の自分に管やら液やら流し込まれている自分が見えた）、臨死体験というのか、幽体離脱か、ただの想像か夢かわからないけれど、その中でなぜだか確かに「あ、子宮は残ってる！」と感じました。だから、手術後初めて母に「子宮は残してもらったよ」と聞いた時も、「わかってる…」という感じだったんです。

やっぱり女は子宮にこだわってしまいます。「死んでもいいから、子宮は残して」なんて、体は死んでなくなっているのに、ぼつ～んと子宮だけ残っていたらおかしいですね。

それからはもう入院生活は私にとって興味深いこと、楽しいことばかりで、病院 ホテル暮らしをエンジョイしました！入院なんて絶対したくない、するはずがない、と思っていた私ですが、入院とはこ～んなに楽しいものだったのか！手術を受けてみるのも後になってはいい思い出であり、人生において貴重な体験です。そして、先生、看護婦さん、ヘルパーさんたちの献身的な医療と看護には改めて深く深く感謝したい 気持ちでいっぱいです。

シャバの空気を十分に満喫しつつした今では、不謹慎にも、また入院してみたい！ と思ったりもして。本当に本当にありがとうございました。 --

## 手紙・その5-東邦でお世話になった先生、看護婦さんへ

2度の手術から2年が経ちました。

私には今回の上京でぜひもう1度訪れてみたい場所がありました。それはお世話になった大田区大森の東邦大学医学部付属大森病院です。当時の看護婦さんは少なくなりましたが、それでも「あ、楠本さんでしょう！手術の時のキズはよくなりましたか」と私のことをよく覚えてくださっていて、とても感激しました。

東邦でお世話になった全ての方にお会いできなかったのが残念でしたが、しばらくの間、病院内を見学させていただきました。何もかもが懐かしいあの当時のままでした。

--皆様、お元気ですか。2年前、ごやっかいになりました”不良”入院患者こと岡山の楠本でございます。振り返ってみれば、大変だった時もありましたが、今は楽しい思い出でいっぱいです。先生や看護婦さんたちと雑談したこと。外出許可をもらって、たびたび東京見物させてもらったこと。入院仲間と病院内を探検したり、隣の病室へ行って夜遅くまでみんなでお寿司を食べながらおしゃべりしたこと。パジャマとスリッパで梅屋敷まで出かけていて、病院の入り口で看護婦さんに見つかったこと。今は懐かしい思い出です。

思い返せば、私が東邦へ運び込まれ、手術が決まった時ははっきり言って、もはや絶望的な気持ちでした。でも、先生方はあのまま”お花畑”を見に行ってしまうような私をひきとめてくださいました。本当にお医者さんてスゴイな！と思いました。

また、東邦の先生方、看護婦さんは優しい方ばかりで、とても居心地よく楽しく過ごさせていただきました。東邦での私にとって初めての入院生活は大変貴重な思い出となりました。

何よりも入院、手術の際に皆様にとってもお世話になったこと、私、一生忘れません。そして、緊急手術の際、連続の手術でご多忙にもかかわらず快く執刀してくださった大村先生。的確な判断でいつも優しく見守ってくださった、同じ女性として尊敬すべき長谷川先生。見舞い客のほとんどいない私のためにたびたび外出許可を出して下さったり、いろいろと精神的な面で気遣ってくださった笑顔がトレードマークの渋井先生。本当にありがとうございました。

また、いつかおじゃまします。皆様もどうぞお元気で…。 --



## なんでもできる体になった

今回のMRIの術後検査では、斎藤先生が以前おっしゃった「術後にまたMRIに入れてあげるよ。今度はあなた眠ちゃうよ」の言葉通り、半分、夢心地でした。術前検査でのあの耐え難かった1時間が、ほんの20～30分にしか感じられませんでしたから…。

撮り終えたMRIの画像を先生と一緒に見た時、本当に先生の力はスゴイと思いました。あの化け物のような筋腫をかかえた子宮が今はなんでもなかったような顔をして、おとなしくちょこんと定位置におさまっているのですから。先生の腕は神わざです。

今はもうなんでもできる体になりました。本当に幸せなことです。ややもすれば、あの頃のことを忘れて、いろんな欲も出てきたりもしますが、いつもあの頃を振り返って考えよう--、それが私の指針となりました。

## 手紙・その6-敬愛なる斎藤先生へ

--この世に斎藤先生がいらしてくださったことに感謝します。私のような全摘すら困難だった手術を先生はやってのけてくださいました。

私が大きなおなかで先生の元へたどり着いた時、再手術の前の不安でたまらなかった時、苦しい時にはいつも先生の力強く頼もしい言葉がありました。

そして、先生の的確な判断により、私を東邦へ送っていただいたこと、とても感謝しています。深夜、東邦に移され、暗い病室へ1人ぼつんと入れられた直後は、正直言って、不安と寂しさで泣き出しそうでした。

しかし、後に6人部屋へ移ってからは、次から次へとたくさんの友達ができました。おかげで多くの人々と知り合えたこと、それは私の財産となりました。人生、何がどうなるかわかりませんね。

また、東邦に入院中、先生は何度も足を運んでくださいました。見舞い客のいない私にとって、先生や広尾の皆さんが私を見舞ってくださるのがとても嬉しかった...待ち通しかつた...。本当にありがとうございました。

先生に関して私が不思議に思っていることに、先生は私たちが頭の中で思っていること、考えていることを全て読みとれるんじゃないかということです。だから、私が言葉で言い尽くせない先生へのたくさんの感謝の気持ちは、先生ならわかっていたいただけますよね！！

でも、術後のMRIを撮り終えた日、これで広尾とも、そして先生ともお別れなのかと逆に悲しくなっていました。だけどこれからも時々、先生に会いに行ってもいいですか？先生はみんなの先生だけれども、私にとっては私だけの先生です。

先生に出会えてよかった。これからも時々、お便りしますね。

先生、そして広尾の皆様、本当にお世話になりました。ありがとうございました。どうかお体を大切に…。いつも、そしてこれからもずっと私たちをあたたく迎えてくれる広尾メディカルクリニックに感謝！--

## 「手術して3年後に結婚。今、妊娠24週です」

南 裕子（38歳）

**妊娠がわかって**

今、妊娠24週です。先日、妊娠の報告をしに主人と一緒に広尾に出かけました。妊娠がわかってからは自宅の近くの大学病院で定期検診を受けていますが、改めて斎藤先生に超音波で胎児の様子を見ていただいて、感激もひとしおでした。

「赤ちゃんは男の子だよ」と先生が教えてくださいました。20週を過ぎれば性別がわかるのだそうです。「おなかの中にいるうちから、ちゃんと名前と呼んで話しかけるといい子が生まれるそうだよ」と先生。さっそく主人と生まれてくる子の名前を考えています。

20週を過ぎた頃から、おなかも目だつようになって、いよいよ妊婦スタイルになってきていますが、不思議なもので、町を歩いていても、おなかの大きな女性や小さな子ども連れの人に目が止まるようになりました。これは妊娠前には気づかなかったことです。

結婚して妊娠するなんて、1年前には思ってもいませんでした。まして、子宮筋腫があることがわかってあちこちの病院を渡り歩いていた4年前には、このような幸せを手に入れることができるなんて想像もできませんでした。

今、つくづく斎藤先生に手術をしていただいてよかったと思います。先生への感謝と、とにかく元気に無事に生まれてくれれば...という祈るような思いで、2月16日の出産予定日を待っています。

**生理が止まらなくなった**

子宮筋腫がわかったのは4年前の秋です。それ以前には特に生理の異常を感じることもなかったのですが、突然、生理が止まらなくなったのです。生理が始まって10日経っても出血がおさまる様子がないため、近くの婦人科に行きました。診断は子宮筋腫とのことで、血液検査の結果では貧血もありました。

とりあえず生理を止めるために、止血剤とホルモン剤を処方してもらって帰りましたが、その時の医師に「止血剤だけでは止まりませんよ」と言われました。本当にその通りで、ホルモン剤を服用するとピタリと止まるのです。

次の月の生理も状況は同じでした。今度は2週間経っても生理が終わらず、また止血剤とホルモン剤のお世話になりました。

「これは間違いなく子宮筋腫だ」と納得した理由のひとつに、母が子宮筋腫だったということがあります。母娘の体質は似ると言われますが、母は30代後半に全摘手術を受けているのです。母の時代にはもちろん斎藤先生もいらっしやらなかったし、「子宮筋腫イコール全摘手術」を母も当たり前のこととして受け入れたのだと思いますが、私自身が子宮筋腫の患者になって病院を転々とした経験から感じたのは、今なお最終的には全摘手術によって解決をはかろうとする医療機関がほとんどであるということです。

## 納得のいく病院を探した

地元で一番大きい総合病院では、当然のように「症状を解消するには全摘しかない」と言われました。子宮全摘をした母を見ている私にとって、これは辛い宣告でした。手術後の母は体調がはかばかしくなく、毎月、病院でホルモン注射を受けていたことを子供心に覚えていましたし、何よりも未婚の私が子宮を失うなんて絶対に受け入れられないことでした。

女医さんなら同じ女性として子宮を失いたくない気持ちがわかってくれるだろうと、婦人科の女医さんを頼って訪ねた都心の病院では、病名こそ地元の病院と同じでしたが「しばらく様子を見ましょう」と言って、積極的な治療は何もしてくれませんでした。

ようやく納得のいく説明が得られたのは、自宅から電車で4駅目にある帝京大学医学部付属病院でした。ここの先生は検査の後で「筋腫そのものはそれほど大きくはないが、子宮の内膜腔に突出しているので、核出手術で全部を取りきるのには不可能です。でも、まだ若いし未婚でもあるので全摘手術はせずに、取れるところだけ取って、妊娠の可能性を残しましょう」と説明してくれました。ただし、「その場合でも、妊娠の可能性は30パーセント。手術によって内膜がはがれ落ちることが考えられるので」とのことでした。

30パーセントという数字に落胆するか、それとも希望をつなぐか。私はたとえ30パーセントでも可能性が残されるのなら、そこに賭けて手術してもらおうか、と一度は帝京大病院での手術を考えました。でも、最後のところで踏み切れなかったのは、ひょっとしたらもっと良い選択肢があるのではないかという思いを断ち切れなかったからです。

## 子宮を失いたくない一念で

あの頃、あちこちの病院にかかっていた私は、週のうち2回も病院通いのために職場を抜けなくてはならない状態でしたが、幸い職場には既婚で子供のいる女性が多く、「病院を優先していいから」と理解してくれたのはありがたいことでした。ただ、若い同僚にはあまり知られたくないという気持ちはありました。

皮肉なもので、子宮を失うかもしれないという現実と直面して初めて自分の人生について考えました。それまでは将来結婚することも、妊娠・出産することも成り行き任せ、どちらでもいいと思っていたのですが、子宮筋腫がわかってからは、どうしても子供を生みたい、そのためには絶対に子宮を失いたくないという強い気持ちに変わりました。それがなかったら、斎藤先生に出会うことも、結婚して妊娠することもなかったと思います。

斎藤先生の本『子宮をのこしたい 10人の選択』に出会ったのは、病院通いのある日、自宅の一番近くにある本屋にふと立ち寄った時のことです。さほど大きくもない本屋に並んでいた先生の本に吸い寄せられるように手を伸ばし、すぐ買って帰りました。

本を読んで「ここしかない」と思った私は、本の巻末の「診察から退院まで」に紹介されていた和泉信子さんという患者さんに電話をしました。広尾に電話をする前に、まず患者さんの話を聞いてみたいと思ったのです。和泉さんは千葉市にある美容院のオーナー美容師さんで、退院してから元気にお店で仕事をしていらっしゃる写真に添えて、お店の名前が書いてあったのです。

和泉さんが同じ千葉に住んでいるという親近感もあり、お店の名前を頼りに電話番号を調べていきなり電話した私に、和泉さんは親切にいろいろな質問に答えてくださいました。和泉さんのお話を聞いて、広尾で手術してもらおうという決心は一層深くなりました。

## 手術、結婚、そして妊娠



94年の新年が明けてすぐ、1月4日にMRIなどの術前検査を受け、10日に手術を受けました。この日は新年になって最初のオベ日でした。

摘出された筋腫は120グラム。グラム数こそ多くはありませんでしたが、子宮筋腫全体が子宮内腔内に大きく突出した粘膜下筋腫でした。「子宮内膜は切開していないので、将来の妊娠には影響ありません」という先生の言葉を聞いて、私も母もどんなに嬉しかったか。母は

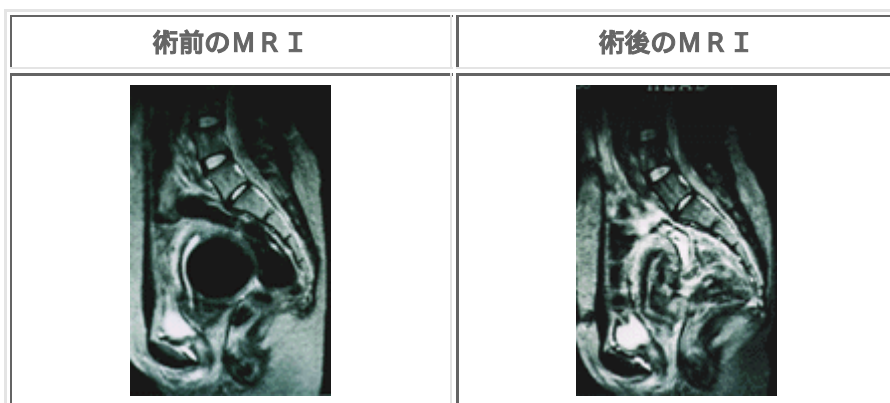
私が同じように子宮を失うかもしれないということを誰よりも心配し、悲しんでいましたから、子宮が救われた喜びはひとしおだったと思います。

下腹部の切開部分は5センチと小さく、手術中の出血も64ccとごく少量でしたので、術後の経過は順調で、その週の土曜日には退院。2月には職場復帰し、元気になった私を見た職場のみんなからは「執念で病院を探した結果だね」と言われました。

さて、最後に主人との出会いから結婚、妊娠までをお話します。友人の紹介で初めて主人と会ったのは昨年秋。今年に入ってトントン拍子に結婚の話が進んで、4月15日に結婚式を挙げました。結婚が決まって、主人には広尾で手術を受けたことを話し、退院の時に先生からいただいたファイルを全部見せました。手術の後に、妊娠に影響はないと言われてはいましたが、主人には「結婚しても妊娠できるかどうかはわからない」と正直に話しました。「それでもかまわない」という主人の言葉がなかったら、はたして結婚に踏み切っていたかどうか...。斎藤先生がおっしゃっていた「結婚が決まったら、彼には手術のことをきちんと話してあげるから、いつでも連れていらっしゃい」という言葉も、支えになりました。

主人がよくわかってきて、二人で斎藤先生をお訪ねする間もなく、結婚して2カ月後に妊娠していることがわかりました。その時の心の底から沸き上がるような嬉しさを今もはっきり思い出します。さっそく先生に手紙でお知らせしましたが、すぐに「幸運を呼び寄せたのはあなたの力」というお返事をいただきました。3年前の患者のことは覚えていらっしゃらないだろうと思っていたのに、「超音波で赤ちゃんを見てあげるから、ご主人と遊びにいらっしゃい」とまで書いてくださって、本当に嬉しかったです。

広尾で手術した後に妊娠したケースはこれまでに80例を超えると聞きました。選択を誤れば当然のように全摘されていた子宮に、こんなにもたくさんの新しい生命が宿っているという事実に感動しています。



## 「痛くて辛かった腺筋症の日々が過去のことになった」

金田 郁子（25歳）

## 夢のまた夢だった留学

つい先日、ハワイ一人で1週間行ってきました。内性子宮内膜症（腺筋症）の痛みから解放されて3度目の海外旅行です。

ハワイが好きなんです。気候、風土が私に合っていて、いつかはハワイに永住したいと考えているくらいです。私が好んで行くのはホノルルの裏側の、いわゆる観光地ではない所で、そこまでオートバイを走らせて行きます。気に入った景色に出会えばオートバイを止めて眺め、こんな家に住んでみたいと思うような民家があれば庭先にオートバイを止めてひと休みし、といった気楽な一人旅です。格安のチケットを手に入れてハワイまで飛び、現地でも安いモーターに泊まるチープシックな旅ですが、気分的には最高にぜいたくな旅だと思っています。



ハワイに住むためのステップとして、近い将来、アメリカに留学して語学を勉強しようと計画しています。そのためには、ある程度英語が話せなくてはならないので、会社が終わったあとに英会話の学校に通っています。ネイティブの先生を囲んで、ひとつのテーマについて自由に発言するという教室ですが、今は英会話の勉強がとても楽しい。少しずつでも英語がわかってくると、留学も夢ではないという気がしてきます。

留学を考えるなんて、広尾で手術を受けるまでは、夢のまた夢、空想の世界のことでしかありませんでした。でも、空想でもいい、夢物語でもいい、せめて留学の夢とつながっていたいという思いで貯めてきた留学資金が、手術費用になって健康を取り戻させてくれました。たしかに留学資金は無くなってしまったけれど、留学への夢は、もう空想の世界のことでなく、現実になるうとしています。そのことが、何よりも嬉しい。

## 最後まで手術に反対だった両親



広尾で手術を受けたのは、今年の1月13日。新年になって初めてのオペ日でした。腺筋症と診断されていた私は、子宮の内膜に深く入り込んで増殖していた腺筋症の病変部分（70グラム）を、斎藤先生の手で摘出していただきました。

手術の後、傷口はたしかに痛みましたが、その痛みは長年苦しめられてきた痛みとは別なもので、うめくほど痛かった腺筋症の痛みは消えていました。「もう、前のような痛みはないよ」と見舞いにきた母に告げました。その時になって、ようやく母は広尾で手術を受けたことを納得してくれました。

実は、広尾で手術を受けることには、母も父も反対でした。広尾での手術の半年前に順天堂大学病院で手術を受けているのですが、「順天堂で治らなかつたものが、個人病院でよくなるわけがない」というのが主な理由でした。

私が広尾を知ったのはインターネットを通してでしたが、両親にはインターネットで見つけたということを理解してもらうのも大変で、そのうえレーザーメスを使って病変部だけを取り除き、子宮を残すという手術法も両親の理解を超えているようでした。保険がきかない手術であるという点も不安材料のようで、なかなか信用してくれなかったのです。

インターネットで広尾に出会った時から、私の気持ちは決まっていました。斎藤先生に手術していただく以外に、この苦しみから解放される道はないと確信したのは、これまで読みあさったどの本にも「腺筋症は治らない」と書いてあったのに、ホームページには「腺筋症は手術で治る」とあったからです。

「治る」というなら賭けてみよう。そのために留学資金を使い果たすことも惜しいとは思いませんでしたが、両親は最後まで手術には反対で、手術の承諾書にサインしてくれようとはしませんでした。兄を説得して、承諾書にサインしてもらい、ようやく手術にこぎ着けたのです。

## 順天堂病院での手術

広尾での手術の半年前に、順天堂で受けた手術は、お腹のうえから4カ所針を刺して、卵巣腫瘍を治療するというものでした。順天堂での診断は腺筋症と卵巣腫瘍とのことで、しきりに痛みを訴える私に「手術で痛みが軽減するかもしれない」と言って主治医がしたのが卵巣腫瘍の手術だったのです。

順天堂を選んだのは、母が十数年まえに順天堂の浦安病院で子宮筋腫の全摘手術を受けていて、ほかに知っている病院もないし...という理由からなのですが、順天堂での診療は、ご他聞にもれず3時間待ちの3分間診療で、病気や治療についての十分な説明を受けたという印象はありません。

卵巣腫瘍の手術後は、まったく予想に反して、痛みがもっとひどくなりました。「話が違うじゃないか」という医師への不信感がこみ上げてきて、それ以来、病院には行っていません。

生理の時は言うに及ばず、ひと月の半分は四六時中痛い状態で、職場であまりの痛さにしゃがみ込んだきり立ち上がれなくなったこともありました。みんなに見られている、立ち上がらなくては、と思ってもどうにもならず、顔面蒼白でその場を動くこともできませんでした。勤務中も痛さにばかり神経が行って、ちっとも仕事はかどりません。痛くて痛くて食事をやる気力もなく、せっかく母が作ってくれたお昼のお弁当を前に、どうやって家に持って帰ろうかとボンヤリ考えたりしていました。

夜になっても痛くて眠ることができず、思わずうめき声をあげていました。うめくたびに両親は心配して様子を見に来てくれましたが、それがあまりに頻繁なので両親には申し訳ないと思いながらも、また痛くてうめき声をあげてしまうのです。ウトウトしかけると痛さでまた目がさめるという繰り返しで、もう神経がどうにかなくなってしまいそうでした。

## 理解してもらえない辛さ

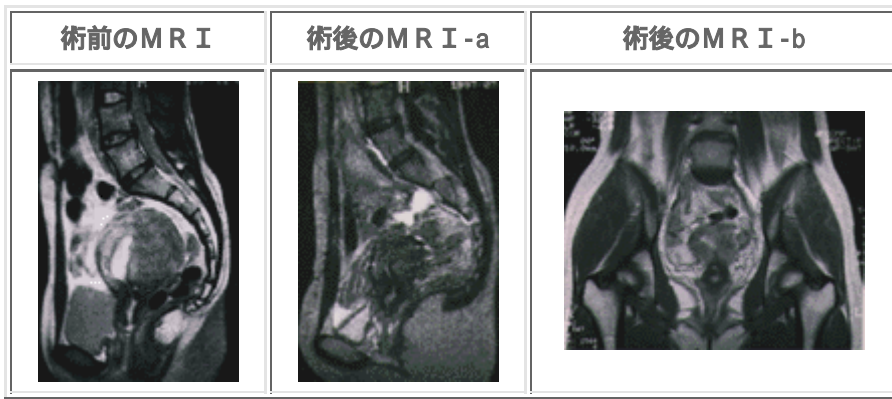
この痛さはおそらく経験したことのない人にはわからないと思います。痛くて、辛くて、職場で一番仲のよい友人に病気のことを打ち明けたことがあるのですが、やっぱりわかってもらえなかった。その時は親身になって聞いてくれて、職場を離れば友人には友人の生活があるわけで、四六時中痛さにさいなまれている私の苦しさを理解してほしいと思うこと自体、無理な要求だったと思います。

上司にも病気のことを包み隠さず話しました。男性に子宮の病気を話すのは恥ずかしい。でも、職場にも迷惑をかけているので、はっきりと話しておいたほうがよいと考えたのです。その時に、上司から返ってきた言葉はショックでした。悲しかった。「そんな病気になるのは、変なセックスをしているからじゃないの」と言うのです。ああ、やっぱりわかってもらえない。痛いのと悲しいのと悔しいのと、いろんな感情がごっちゃになって涙があふれてきました。

でも、健康を取り戻した今は、職場に感謝しています。第1に、職場にいなければ、インターネットで広尾を知ることができなかったからです。昨年、うちの会社にもインターネットが導入されるようになって、同僚に「どうやって操作するの」と教えてもらったついでに、試しに「子宮」と検索ページに入力したのが広尾との出会いです。

手術の時は3週間お休みをもらって、その間は私の仕事をアルバイトの人に代わってもらっていましたが、元気になって職場復帰した日に「待っていたよ」と上司が迎えてくれたのは本当に嬉しかった。痛くて辛い思いをしていたのを知っている同僚たちも「よかったね」と喜んでくれました。

それにしても、痛くないというのはなんて幸せなことでしょう。仕事にも打ち込めるし、英会話の勉強も頑張れる。しっかり働いて留学資金を貯めて、留学の夢に一步步近づいていきたいと思います。



	術前 (pre ope)	術後3カ月 (post ope)
赤血球 (RBC)	327	404
ヘマトクリット (Ht)	34.0	37.7
血色素 (Hb)	10.0	12.5
CA-125	39	30.3
備考	摘出物：75gm 病理：腺筋症 (Adenomyosis)	

## 「全摘手術の直前、夫の強い勧めで広尾へ」

大谷みどり（37歳）

## 夫が記した克明な症状

ここに、夫が記したメモがあります。日付は96年の5月15日。私に代わって、夫が私の兄と一緒に初めて広尾に行った際に、斎藤先生に症状を説明するために書いて持って行ったものです。その時、私は腺筋症で子宮の全摘手術を受けるために東邦大付属病院に入院していました。すでに手術日も決まり、術前検査が進行していましたが、入院中に広尾のことを知った夫が、子宮を失うことを諦めきれずに、斎藤先生のお話を聞きに会いに行ったのです。

メモには、

「現在の症状」として、「高温期...だるさを伴った腰痛、乳房痛」「生理中...出血多く、かなり痛む」「低温期...ひどい痛み」とあり、特に低温期のひどい痛みについて、

- 楽なのは鎮痛剤が効いている間のみ
- 仙骨、腰、恥骨、股間がキリで刺されたように痛い（主に左側）
- 足（もも～つま先）がしびれる
- どこが痛いのか判らない程痛いときもある

と書いてあります。

## 痛みへのうちまわる

夫のメモにもあるように、その頃の私は耐えがたい痛みで四六時中襲われていました。思い起こせば、痛みが加率的に強くなってきたのは、東邦に入院する半年前の95年の夏以降です。

肛門の奥をキリでギリギリと差し込まれるような痛さに、何度「ギャー」と声を上げたことか。内服の鎮痛剤ではとても効かず、1日に2度を限度に使うことを許されていた座薬の強い筋痛剤でなんとか痛みを抑えるという状態が毎日毎日続いていました。

とりわけ辛かったのは、排便に連動して痛みが増大することで、前日に食べた内容物が腸に下りてくる明け方頃から痛みが強くなり、朝の8時頃から夕方まで頻りにトイレに通って、やっと少しずつ4～5回に分けて出るといふ繰り返しでした。痛みを耐えながらトイレに座り、腰のまわりをドライヤーで15分くらい温めて、ようやく出るといふこともしょっちゅうでした。

排便しても常に残便感があり、肛門のあたりをキリで刺されるような痛みはさらに強くなるのです。あまりの痛さにホットカーペットで体をぐるぐる巻きにして、その上からドライヤーで腰やお腹をガンガン温めて、痛さを紛らわしました。痛くて息もつけない時に、こうして汗が流れるほどに温めると、ようやく一息つけるのです。



## 体重は35キロに

来る日も来る日もこういう状態ですから、もちろん食欲もなく、東邦に入院するまでの半年あまりは、りんごを摺って食べるくらいしかできず、体重は35キロまで落ちました。痛みで消耗しきった上にろくに食べられないので体力がなく、考えることといたら、どうしたら痛みから少しでも楽になれるだろうか...ということばかり。鎮痛剤が効いている間はウトウトできるのですが、それも束の間。また、痛くて痛くて身の置きどころがないという状態でした。

夜になってどうにも痛さが我慢できずに、緊急外来に駆け込んだことも1度や2度ではありません。緊急外来の処置室が満員で、廊下のベッドに寝かされたまま、衆人の視線を浴びながら痩せたお尻に痛み止めの注射をしてもらったこともあります。もう恥ずかしいなんて言っていられる余裕もなく、とにかくこの痛みから逃れたい、その一心でした。

あまりの痛さに医者から「腺筋症の痛みとも思えない。骨盤内腹膜炎かもしれない」と言われたこともあります。生活のすべてが痛みとの闘いで、「誰のせいにもできない自分との闘ってこういうことなのか」と、鎮痛剤でもうろうとした頭で思っていました。

## 楽になりたくて全摘を決意

こうした痛みとの闘いの末に、「この痛みから解放されるには全摘も仕方ない」と全摘手術を受けることを決意し、東邦大に入院したのですが、ここに至るまでに、実は5つの病院を転々としているのです。検査だけで3カ月かかった病院もありました。

診断の結果はどこも腺筋症で、症状を改善するにはホルモン治療か全摘手術しかないとの説明を受けました。スプレキュア、ピル、ボンゾールを使ってホルモン治療も受けましたが、どれも私には副作用が強くて、スプレキュアを半年使ったら白血球が減少し、値が約2000まで落ちてしまったり、ボンゾールを使ったら全身に発疹が出てしまったり、どれも体を痛めこそすれ腺筋症を治すものとはなりません。ピルにいたっては、使い始めたらすぐに血圧が約30も上がってしまい、動悸や吐き気がして、これは1日で使用を中断しました。

ホルモン治療がダメなら、残された道は子宮全摘しかありません。手術を決意するまでの半年あまりの痛くて辛い日々を思えば、「全摘で痛さが解消できるなら、それでかまわない」と、すぐにも手術してほしいと願いました。

ですから、夫が手術の直前になって、広尾を知り、「もしかしたら子宮が残せるかも知れないから、全摘手術の承諾書にはサインをしない」と言い出した時には、「私が全摘でいいと言っているんだから、もう余計なことを言わないで」と喰ってかかったほどです。

## 斎藤先生を訪ねた夫と兄

私にしてみれば、さんざん苦しんだあげくに決意した全摘手術に、しかも手術日まで決まっていることに、何を今さら横やりを入れるのかという思いでいっぱいだったのです。

彼が心配してくれていることはわかっていました。腺筋症がひどくなって勤め続けることができずに退職し、家で痛さに耐えていた私を気遣って、夫は勤務が定時で終わる公務員に転職してくれていましたし、職場からも毎日のように「大丈夫か」と電話してくれてました。

広尾のことを夫に教えたのは私の兄で、兄はずっと以前に新聞で紹介された広尾の子宮保存手術を覚えていて、「全摘する前に、行くだけでも行ってみたら」と夫に教えたのです。冒頭に「夫が私の兄と一緒に初めて広尾に行った際に...」と書きましたが、それはこうした経緯があったので、とにかく「話を聞くだけでも」と私の症状を書いたメモを持って男二人で広尾に行ったのです。

斎藤先生に会ってきた夫は、東邦に入院中の私にこう言いました。「腺筋症のことや保存手術のことなど、いろいろと質問したけれど、納得の得られない答は何ひとつなかった。腺筋症は手術で治せるし、子宮も残せるということが過去のケースからも納得できた。だから、1度、斎藤先生に診てもらおうよ」。

夫が手術の承諾書にサインしないために、全摘手術を手術予定日に行うことは見送られ、私は東邦大の担当の先生に正直に事情を話しました。全摘手術を執刀しようとしている医師にとっては、その正反対の子宮保存手術を受けることを選択しようとしている患者は、あまり気分のよいものではないでしょう。それでも、その先生は私の話に耳を傾けてくれて、「摘ることはいつでもできるから、外泊ということにしておきましょう」と言って、ちょっと家に荷物を取りに帰るような感じで帰してくださいました。

東邦で同室だった患者さんたちにも、事情は伝わっていました。みなさん、全摘手術を受けたか、これから受けようとしている患者さんなのに、逆に「まだ若いんだから、諦めないで頑張りなさいよ」と励ましてくれて、涙がこぼれました。東邦で出会った担当の先生と同室だったみなさんには本当に感謝しています。

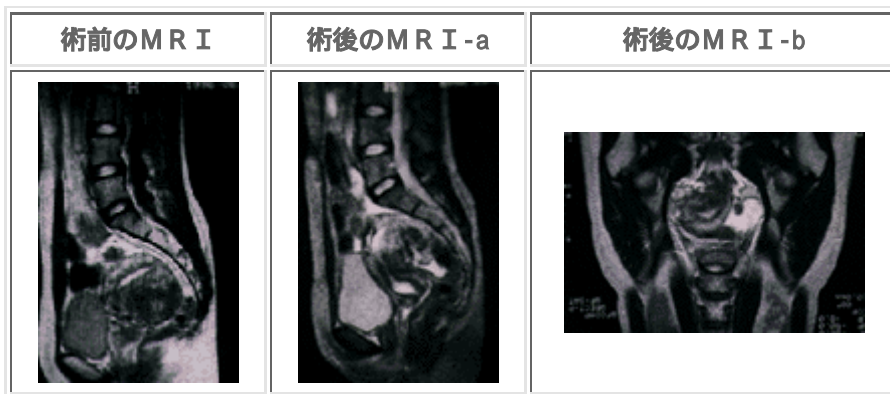
### 全摘を思いとどまってよかった

全摘手術の直前に、全摘から保存へと180度方向転換した私は、自宅へ帰った後、夫に付き添われて5月末の木曜日に初めて広尾へ行きました。これまでの症状を語った私に、先生は「耐えがたい痛みは腺筋症によって膨らんだ子宮後部が太い神経の束に当たるために起きるもの」とわかりやすく説明してくださり、それも手術で解消できるとMRIを見ながら話してくださいました。

そして、何より私を納得させたのは、その週の月曜日に手術をした患者さんと、術後3カ月の検査で来ていた患者さんに会って、体験談を聞いたことでした。やっぱり、全摘手術を思いとどまってよかった、とその時思いました。

6月に手術は無事に終了し、術後、あれほど私を苦しめていた痛みが劇的に消え、生理時の出血が少なくなったのは驚くほどです。元気になった私を見て、夫は言いました。「僕は男だから、腺筋症の痛みがどのようなものなのかわからないけど、あの痛がりようをそばで見ている者としては、あの苦しみの上にさらに子宮を失うんではかわいそうだと思う」

夫の言葉ではないけれど、腺筋症で苦しんできた女性が苦しみの末に子宮を失うなんて悲しすぎると私も思います。



	術前 (pre ope)	術後3カ月 (post ope)
赤血球 (RBC)	454	435
ヘマトクリット (Ht)	41.1	38.8
血色素 (Hb)	13.9	13.0
CA-125	180	23.8
備考	摘出物：21.1gm 病理：腺筋症 (Adenomyosis)	